



夷巡嶋記

卷三

春

長富

春

庫書	108
5	80
	160
158	號番
40	數冊

~ 13
3093
14



授子歌

昭和九年
七月三日
海味

朝夷巡鳩記全傳第三編卷之四

東都 曲亭主人編輯

鸞鳳の日蔭花

副將の晦之月

中輯第廿七

吉田屋

信夫莊司元晴ハその日ヨリ義邦の動靜云為を試る。辞寡しく信
あり才高しく邪か。加以その容止美麗ハ一儔多う侍べくもあ。ねハ
あ。ろよあうく愛敬。い。く程もかく廣光。又媒妁をそくその孫女。筐姫を
義邦。又妻けり。され。が。この。筐姫。と。ま。え。ハ。實。ハ。前。伊。豫。守。九。郎。判。官。
義經の息女。之。往。時。文。治。三。年。高。館。の。城。中。め。く。生。れ。あ。ひ。死。か。て。お。れ。死。
五年。閏。四。月。晦。日。泰。衡。が。野。心。よ。り。高。館。の。城。攻。ら。れ。死。判。官。公。が
妻子を刺殺。し。その。身。も。自。殺。し。あ。の。程。元。晴。竊。子。件。の。姫。を。人。を。救。へ。ん。

月長編卷四

草書三編卷四

めうく隠し養育し筐姫と名つけし。今茲ハ二ハの春秋あり。現
 義経の像見とるもの。これ下らるもの。義経の名を負せし。一
 のりへ同姓を娶らざると。本文あまも。後世ハさる沙汰。及つて義経
 筐姫ハ正し。後弟どちや。共ニ日蔭の花。その才色ハ芳らむ。
 優さ。終中世。お出ぬ。時中もあひぬ。と。その方々。人の多り。ま
 ども義邦ハ只顧。辞退し。且く引さ。かど元晴。頻らう。歎て
 其ハ子共夥。も。れども不幸。皆世を早う。判判官。進ませる。
 嗣信ハ八嶋壇浦の戦。陣歿し。忠信ハ吉野。畠り。更ニ潜び。く
 都。上り。いく程。もなく。自殺し。兄弟共。忠臣の名。をの遺。を故郷
 あり。二人の婦。ハ尼。あり。越後國。赴。出雲。崎。并。を。締。年。来
 行。ひ。澄。し。是。去。去。歳。打。つ。往。生。の。素。懐。と。送。り。
作者云越後の出雲崎に

後を忍ぶ。犬馬の齡七十餘。歳。惜。く。も。あ。ぬ。命。も。ご。も。心。よ。か。こ。を
 姫。う。へ。の。昔。も。か。や。赫。奕。姫。が。親。あ。わ。ぬ。翁。が。情。願。只。の。う。ま。と
 唧。あ。く。口。説。し。義。邦。ハ。元。晴。が。誠。心。を。感。佩。し。竟。ニ。推。辞。し。あ。く。て
 この婚嫁を結ぶ。かく。婚。礼。の。式。を。ど。も。あ。ら。う。潜。び。や。う。の。竟。終。り。て
 その三日の壽。元。晴。ハ。腹。心。の。老。黨。水。草。十。郎。昌。甫。城。戸。三。郎
 守。詮。ホ。を。集。會。く。酒。り。々。し。け。る。夜。足。利。左。馬。介。義。兼。の。軍
 兵。催。促。狀。到。来。を。の。略。云。及。逆。人。藤。原。泰。衡。が。殘。黨。大。河。太。郎
 兼任。が。子。經。任。五。郎。先。亡。の。餘。類。を。聚。り。く。厨。川。の。古。城。に。蜂。起。頻。々
 進。で。平。泉。の。柵。を。縁。り。近。屬。と。の。び。え。あり。因。茲。義。兼。兼。鎌。倉。殿。の
御家の

三編卷四

武命を兼り征東の摠大将なり刀野時夏副将なり則九月晦日足利を
 進發し上野下野の軍兵数千騎を引卒し既白河の関を踰る
 速業内の軍兵を馳催し路次まで出迎ふべし者也と書する元晴
 讀訖眉を顰むこの足利左典廐ハ歴々源氏なり且執権時
 塔あれば追討の大將さるべし時夏何ホのゆれば副將軍は拜せ
 られ長生まればさるべし珠夏をもさくものゆれば此度の合戦ハ
 果敢くかべり縦嚴命あればとまれ時夏が下は立んや傍痛
 と啖死つ聴く答書をせと老病もあつく歩行自由なれば稱次の日城戸
 三郎守詮を大将として軍兵二百騎を義兼の陣所へ遣しこれより義邦
 廣光を呼び深く潜しうさ行程は刀野太郎時夏ハ曩は執権時政の
 内意を得く竊は歎び恩赦遅しと俟りゆく三伏の暑日ハ早晚

秋の初風は立ちりれども沙汰もあしあまりの心りも又一計を
 出して腹心の善黨矢塚達六といふものを鎌倉へ遣し義邦義秀井平
 等あびくは陸奥へ赴た平泉の柵に入り経任重くを用以て民の
 心を攬し六六郡の愚民属後ひて既ハ大事は及びぬと流言をせりける
 件の矢塚達六ハ年来時夏に使れく奸智あるものあれば井平がせりて
 ありものづら出頭して刀野が家の宰ありかり程は時政ハ件の流言を傳
 へて大に驚駭駭駭且その始終を慮ふは彼義邦ハ蒲廐の子といへば
 経任を主として義経の故事は倣ひ愚民ホと釣るあり又朝長と
 いふ奴ハ万夫不當の勇ありとせし加ふるは井平ハ此彼經任を資るは虎
 翼を添ふに就中憎くも憎飽るハ井平ハ這奴ハ總角の比ありとせし
 仕る恩は負た又時夏は後をばいく程もかく義は背なりとせし彼奴を

生拘りて由井濱に斬梟を八つれ世の人は笑はん憎むべしと敦圀つ。
 臆く其の趣を執達して足利義兼を追討の惣大将とて刀野太郎
 時夏を召還して義邦謀叛の告訴を誓めその勸賞として此度の
 副將軍に拜任しその本領安堵の旨及新恩加増せしむるに軍功あり
 べしと馬物の具を牽けり時夏竟に謀課せし志願一朝に成就す
 歡喜雀躍して恩を謝し且く執権の館に止宿して時政父子を媚
 して餓ら拘り異死す七月下旬は足利へ立上り軍議の席に預り
 けり其時この頃義兼秋暑に冒され八月のつづらに送る上野
 下野の國への豫て御教書を下して軍旅の支度整へども
 大将の病著より其の支度とて九月の日數終りありしに
 時政を催促せしこれより義兼への金く愈されども病を推て

その晦日下野を進發し白河より進軍兵無慮三千餘騎副
 將軍時夏へと華やかなりし物具して太逞に馬を乗り一千餘騎を引卒
 ち先陣に拍せしるの爲に四下を拂き見たり義兼へ
 日よむくと五六里あり後れて来る味方を待つ十月八日は國府の城
 宮城郡に來著して兩三日人馬の足を休めあり地理を問敵の強弱を
 考むる程に信夫莊司元晴が花黨城戸三郎守詮に會て元晴が
 口状を述べ義兼則守詮に郷導させし遂に江刺郡をせしむるに
 鎮守府のやうあり膽澤の神の社頭を到り祈願のりありかく要害の
 地は陣しこの處膽澤郡と境をわたり経任が盾籠る平泉の柵
 速く當下義兼に諸將を聚會し軍議を疑らし賊のうら寄きを
 俟て戦ふに利ありん攻進して攻るに利ありん攻と其の異見を問れり



時夏

城戸守詮

時夏
 騎
 守詮
 軍議
 打と



足利と兼

高階兵衛

田重

寄信 侯人といふあり。進んで攻んとし、衆議區々あり。一決せし義兼、遙未坐あり、多城戸三郎を召近つけ、汝ハ當國の案内より攻ると守ると孰う利あるんまれば、修羅五郎、經任ハ幻術あり。雲を必ひ霧を起し、人の耳目を迷はせ、この虚言、欺實、欺。問れて守詮、兼任が撃れ、比經任甫十五歳、若鷲山ハ逃がれ、有一日異人ハ邂逅し、左道の術を習ふと三年是より、とて里まがて、幻術をりて愚民を迷し、竟ハ逆乱を起し、といへり。又經任ハ四人の賊將あり、神井猛虎、字ハ鬼六、鐵盾重連、字ハ矢藤、五珂浦方相、字ハ五十六、蘇途暴道、字ハ鶉東、二須弥の四天ハ擬う、兇惡無慙の癖者あり。この他賊將をほわべし。あつれども鳥合の惡黨陣法をもち、御陣を些退け、八幡林を前、當あり、軍兵を隠し、置て賊の来撃を

引つけ、軽く戦ふ、敵を驕らせ、伏兵をりて、後陣より、突く、ひく、攻ハ經任ハ幻術も行ふ、暇なく一舉して、擒まへし、急ハ柵を攻め、せめ、賊後脱が、死せり、力を勤せ、志を同うし、防禦との隙を死とて、八連、ハ落べり、寄の退屈、宿を窺ひ、或ハ夜撃、或ハ朝懸、出沒不測の、手段を竭さ、御方の勝利あり、つぎ、後時日を送りて、兵糧乏く、なり、とあり、ハ、や、死、大、ま、ま、の、と、憚る所も、答へ、義兼、頻、う、あ、点、頭、後、ん、と、け、い、ま、く、左、右、を、信、と、え、れ、バ、刀、野、太、郎、市、を、激、し、守、詮、汝、何、物、か、れ、ハ、無、用、の、言、を、動、と、陣、中、ハ、敵、の、勇、を、説、り、ハ、大、將、の、忌、と、り、平、家、富、士、沼、の、敗、北、も、彼、齊、藤、實、盛、ガ、無、用、の、辨、ま、あ、と、こ、揣、さ、は、經、任、兼、幻、術、あり、とい、や、も、原、是、小、兒、の、戲、れ、の、大、兵、下、び、城、ハ、臨、ま、バ、身、を、脱、り、し、暇、あ、ら、ん、然、る、に、况、幻、術、を、や、既、ハ、武、命、を、奉、り、二、毛、上、毛、の、大、軍、當、國、の、御、方、を、お、く、こ、の、処

おく寄せむぐらのおご城を攻むと陣を移し退るば夏は臨み不言の時夏
 不肖なれども副將軍を辱むらむ由舎侍の臆説は少懼し、賊の英
 氣を多しとせんや傍痛しと冷笑し守証へその言の行れざるを遂に
 再びのいつぞ面目を失ひて舊の席は退げば時夏は惣大将義兼に會釈
 多くあられ某が一隊をもと柵を棄取ひん本陣を進めし御方の英氣を
 資ぬる勝利疑ひありと義兼は執權の由縁の故にこの年来扶持する
 時夏が恩免を蒙るべく副將軍の拜任せしれ鎌倉より退りては時夏
 内意あり渠初陣のよりわれが貴所の扶助よも成りて功名を取りか
 りんこのあちをぬくむるべしと消息はせえしとともかくも時夏は
 軍功ありせんともふあめく今その大言をすく荒介とうち笑み勇あり
 勇あり哉りや計略ことしむもいざ賊の柵を矢の一條も射しけ

ぞくこの也を退る賊の英氣を倍の之義兼の後陣は續ん攻一攻く
 るるべしと愉く許せし時夏は欣然としてかの陣は立ちへり軍兵の
 部しとを真先は騎せむその隊の士卒二十餘騎隊伍を整へ旗を
 進め平泉の柵へ寄る程は惣大将義兼も二十餘騎を三隊に備へ徐馬を
 進め是より先は経任の追討の大将義兼時夏三千餘騎を引率し
 とも江刺まで推寄せ來つ鎮守府は屯しと注進擲の齒を挽ども此も
 騷む領くの之股肱の賊將神井鬼六鐵盾矢藤五を召進つけ義兼は
 名家の子孫夏は熟る老黨も多切べく且沈重め多く思慮ありと受け
 悔りが死敵あり但時夏は黄雀の貪り啄く飽しとをいひ義兼は
 早蠅五頭平をとり渠を引込せしれども五頭平果敢多く生拘られ
 遂はとも成らざれば今度の戦は時夏が副將するハ則味方の幸に

され既謀を設置つ鬼六へ五百騎をぬく泉川のさへ陣と敵の
 川を渉をえんべその中流に到るを撃つ又矢藤五へ三百餘騎をぬく
 川上の趣に暗号を俟く堰苗のたつ堰を一度に断り落せよ敵の
 疑なく泉川を渉るに罵り辱しめ怒せよこの他の進退機は臨
 変に應じて欺引を時夏を生拘るべし渠を捕まれば義兼を敗
 石は卵を擲より易うりよかやか説示せば鬼六矢藤五領掌し
 のく賊兵をぬく柵をせりる程は乃野太郎時夏が一軍泉川の上
 到る前面を信とえむ六賊兵は四五百騎河原面よりちり
 時夏うち見ると冷笑ひればとて異なり賊のしく小勢
 河川水も亦浅やうれば膝の上を過るべし衆皆渉せと下知れば
 城戸三郎諫めくはちり賊の小勢も戦ひを持らば別は謀ある

ありべし且この川の恒は水高く流急なり況や雨後のことれば水夏
 増へるは俄頃浅瀬よりちりる不審し後陣へ謀ト合せて後まを
 いせもあへば時夏呵くと冷笑ひ和履のしく臆しちるれば其許の
 郷導をぬくは如世に後陣は退る大將は注進せよとく焦燥
 ぬく詮は勢をぬく臆く後陣は立ちり云くのよしを告うら
 義兼は眉を擡り守詮が異見ともおへし時夏は血氣を来
 ちり川を渉るに過失わらん速に禁めよとて老黨糠田重正を遣し
 時夏はものちをぬき又城戸守詮は單兵三百騎をぬき如く敵の
 ちりともゆくとて遠く川上へ遣しちりかくり程は重正は先陣に
 走りし時夏は對面し大將の背を逐く叮嚀に制りし時夏は
 ちりる前面を覗く扣る賊將鬼六猛虎へ寄るの川を渉るは

足高く声高死めをせり。かたは罵らせ或ハ馬より立ち立く沙石の
 上は臥もあり或ハ尻をこき入向く打たれつ笑もあり傷若衆の為は
 時夏ハ怒り始堪介殿左馬介 義兼 ありは速慮しと唇のくちくち如し
 鳥合無懸の逆賊はぐらをくらの謀を志しけり。彼撃せられせし
 救圍つ真先馬を進めく川へ颯と乗入れろ相徒ハ早雄の軍兵四五
 百騎食後色どと川を涉り多かりより浅うなれば後がものも
 逸足せり水中まどう立ち立ろ浩如ハ敵の陣後ハ一声の雷音響き
 一道の烽燧閃け沖る程をあれ川上より断落し水忽然と激流し
 疾く矢のどく人馬の足を衝倒せ中流に漂へる五百餘人ハ推
 流され先子進し兵ハ辛く向の河原に政登るかれ二百餘人待儲る
 敵兵ハ射倒さる破伏られ生くかへるかろけり。中ハ時夏ハ馬の

平首ハ抱れ著後卒矢塚達六ハ主の馬の尾をゆめかき流さるる
 十町むろり敵の抓子棒ハ懸られ主後共ハ阿容くと沙上ハ引上られ
 臆てぞ索を掛られける先陣墓かく敗れろ。とぞかく後陣ハ見え六
 義兼これぞ救んとく頻りハ諸軍を進やかも刀野主後ハ生拘られ
 急流溢瀆りて涉まべくもあざれば只管空箭を射り方のも亦せんべハ
 ありろ。當下神井鬼六ハ鞭をりて義兼と西三ハびさ招けば衆賊
 咄と笑ひて勝閑を揚生物を牽立と徐くと退く程ハ寄子の士卒ハ
 眼を睨り拳を捺りて眺まろ義兼怒氣胸ハ満るめつども大息切た
 時夏漫ハ血氣ハ早りて軍令を用ひぞ味方の士卒を夥撃せその
 身も擒はせられろ。刀野を救ひぬる北條殿ハ何とろのべき
 この川堰ろ水もろ落るとも速あろ日あろ柵を攻破りて時夏を

救ふべし。血氣の善武者は、愆れたと後悔し、鎮守府を退く。
 程子城戸三郎守詮は、川上は到らぬとも中途おして水岷の砦項増を
 先陣川より入り、敵の謀は陥つらん。今ハ、甲斐の
 其処より陣所へ還り、案下某生再説修羅五郎、經任へ神井
 鬼六、鐵盾矢藤五、ホガ注進、遲しと俟程は果し、鬼六、猛虎ハ時夏主後を
 擒ふ。矢藤五と共に、帰陣して勝軍の支の趣、巨細は告ぐ。經任は、
 歡び、二人を勞ひ、過衣裳を更、牡丹花の間より出、經任が、四天王
 環浦五、五六、蘇塗、鶴東二、神井、鬼六、鐵盾、矢藤五、この他の賊將十
 餘人、身甲し、大刀と帶戟と執り、その左右に侍坐し、又
 庭上、の番械と樹立、弓箭を取、賊兵二百人、齊くと、隊伍を乱さ、
 整くとして、列をかせり、かく、五七人の賊卒、木時夏主後と縛り、
 大床の下に牽居、經任これと告ぐ。渠ハ、寄、の大將、牧何と、呼ぶ、
 名ハ、ゆるん、と、名、の、良、は、向、く、神井、鬼六、進、を、出、す、が、將、軍、も、豫、より、その
 名ハ、知、食、う、久、渠、ハ、寄、の、副、將、軍、刀、野、太、郎、時、夏、あり、と、告、る、を、經、任、
 豫、和、殿、の、人、と、多、し、傳、々、景、慕、の、思、ひ、己、が、く、竊、は、五、頭、平、と、り、
 愚、意、を、か、へ、せ、既、子、好、を、結、び、く、此、度、寄、は、あり、と、い、ふ、を、も、怨、敵、の
 矢、を、射、う、け、刀、を、お、ぐ、え、刺、擒、ま、せ、ハ、慮、外、の、失、礼、慚、愧、は、堪、は、り、
 舊、交、を、忘、ま、は、許、し、あ、へ、と、う、ち、勸、解、く、聽、く、その、傳、を、釋、免、の、事、を、
 携、つ、上、座、に、誘、引、へ、鬼、六、夫、藤、五、これ、を、と、り、遠、く、席、を、避、不、慮、の
 合、戦、を、賸、話、ま、う、時、夏、ハ、あ、ひ、う、け、く、助、命、せ、う、その、事、を、

大床の下に牽居、經任これと告ぐ。渠ハ、寄、の大將、牧何と、呼ぶ、
 名ハ、ゆるん、と、名、の、良、は、向、く、神井、鬼六、進、を、出、す、が、將、軍、も、豫、より、その
 名ハ、知、食、う、久、渠、ハ、寄、の、副、將、軍、刀、野、太、郎、時、夏、あり、と、告、る、を、經、任、
 豫、和、殿、の、人、と、多、し、傳、々、景、慕、の、思、ひ、己、が、く、竊、は、五、頭、平、と、り、
 愚、意、を、か、へ、せ、既、子、好、を、結、び、く、此、度、寄、は、あり、と、い、ふ、を、も、怨、敵、の
 矢、を、射、う、け、刀、を、お、ぐ、え、刺、擒、ま、せ、ハ、慮、外、の、失、礼、慚、愧、は、堪、は、り、
 舊、交、を、忘、ま、は、許、し、あ、へ、と、う、ち、勸、解、く、聽、く、その、傳、を、釋、免、の、事、を、
 携、つ、上、座、に、誘、引、へ、鬼、六、夫、藤、五、これ、を、と、り、遠、く、席、を、避、不、慮、の
 合、戦、を、賸、話、ま、う、時、夏、ハ、あ、ひ、う、け、く、助、命、せ、う、その、事、を、

管待等閑わつ後。且惚且疑ひく賓席はぬ著に袋を被りし。
 猫の如く額をつ尻尻と叩く。遠巡とのこされば。任仕遣は達六を指さして。
 渠へ何者ぞと問ふ。時夏これとんくく其の腹心の家諫ふいと答れば。
 うち領だく又達六が傅を釋放させく。喉の平し主の後方ふゆるせう。
 當下時夏をくくはる。額の汗を拭ひ其豫く將軍の尊意を。
 ざるよわくせれども。いうせん。勅は擇まされり。副將の大任脱れく陽子。
 武命は應どうれさ。れ某戦ひはあふあられ。うち負く既は擒ふあり。
 ころど許さうのこめを。賓主の礼りてせらるる。再生の恩知己の幸。
 何る欲これよ。まん用ひらく。とわく。筋を断骨を打り。犬馬の勞を。
 盡まへ。貳あくゆと誓と立く。媚く。任仕ろく。歡びて既はいへる。
 ごとく。則王が幸ひ。之席を更め。勸盃せん。誘ふと先立。立く。後

堂は伴ひの新衣裳をせし。濡らる衣を脱更。賓主の坐定。おれば。
 準備を。ころけん。いと艶妖ある。婢們十餘人。ふみく。盃盤を捧げ。美酒。
 佳肴と按排べく。時夏は勸め。う。玉血ハあつ。と。順。遠ら。
 逆。返。既。半。酣。及。及。死。歌。妓。ホ。声。妙。ハ。歌。ひ。奏。は。る。管。絃。ハ。鄙。や。わ。
 おれど趣あり。仙國はあり。といふ。如。陵。頻。伽。ゆ。と。いと。愛。こ。浩。処。は。年。紀。
 二ハ。あ。り。あ。り。白。拍。子。水。干。ハ。烏。帽。子。と。扇。を。閃。し。舞。を。う。こ。任。任。が。
 妾。あ。り。陸。奥。二。の。美。人。と。ま。ま。一。文字。撮。り。以。淫。婦。あり。時夏ハ。既。よ。そ。の。
 艶。曲。を。さ。さ。く。心。耳。を。蕩。し。又。こ。の。歌。舞。を。観。く。魂。天。外。ハ。あ。り。文字。撮。り。は。
 顔。ハ。み。野。の。春。も。敷。や。又。嬾。や。柳。の。腰。ハ。安。積。の。采。女。も。及。ぶ。
 べ。一。文字。撮。り。左。は。迷。れ。バ。時。夏。が。晴。左。は。何。り。文字。撮。り。立。く。右。は。寄。
 れ。バ。時。夏。が。晴。右。は。在。り。こ。の。時。め。く。人。よ。め。い。つ。を。あ。く。持。る。盃。の。

傾くを覺ぞ歌舞ハ三曲の果一六経任ハ文字搦を召び果のせと
 をのく酌を執らるる程ハ時夏馳酈一と泥の如し又枝刀野が家隸夫塚
 達六をも主の所用をうけかかれとて間近く侍せしむるその饗膳主の
 時夏ハ異あつとてかかて経任ハ時夏主後を誘引くよつ土庫ハ赴たつ
 金錢財宝の多記をいせとて軍用ハ多しかたを示し又影建ハ
 倉廩ハ趣く山の如く積上る兵糧ハ数年の貯あつと示し又兵庫ハ
 赴たつ武具矢種ハ富るを示し又衣倉ハ赴たつ
 示せば時夏主後ハ觀毎ハ賞賞一往時六郡のまより一泰衡按察使の
 富といふもこれ其も入るを稱する程ハその日ハ暮まれば
 経任ハ燭を續せとて夜燕を催し更闌く主客酌を盡し各臥房ハ
 入るに及びくも時夏を釣んるは冬の夜長ハ頃あれば寤寢の間全
 せられとて彼文字搦を遣はれば時夏忽ハ望と足りく十二分の飲び
 あり又文字搦ハ経任が密意をぬるものあれば飽までハ媚を執らる

小鹿の角の束の間もさあつとといふ私語ハ時夏もあつて現を脱して身皮
 あつハ體を合せん死かばあつ日同穴ハ墓らんとて契りる既中ハ第
 三日の曉昏ハ経任ハ時夏を閑室ハ招たつといふやうも志願空うとて
 和殿ハ對面せ一日よりあつ捨たつと思ひ願ハ永く苗りて富貴を共
 受あへりや鎌倉ハ帰奉るも頼家暗弱ハ政事ハ親も時政
 父子とて外威の威を逞く一黨を樹推を弄びて喜怒賞罰のがや
 ぬれこの故ハ喜ぶと死ハ功あれば賞一怒ると死ハ罪あれば罰せり彼
 暗君ハ任彼賊臣の蔭ハ石を抱たつ淵ハ臨と薪を負つて
 火ハ近つとて持ハ危たつあつれどもかへり去んとあつ強て

苗人と云ふは、御経任不肖あるも、厨川は義兵を起し、より戦へば、
捷攻むれば取る膽況より北のくの外は濱に至るまで悉皆とが有あり。
進ての敵地を畧し退ての自國を守り進退出没自由をゆるし加梅
それ亦一桁あり雲を起し風を吹び草木をゆり士卒と一瓦石を
撲く牛馬と及在鎌倉の大小名貞を竭し推寄来るともそれ只
屑ともせぬこれ見ゆへといひくけく口は咒文を唱れば一衆の黒雲
経任が頭の上は天靡降りて暫時姿を隠しつり時夏は幻術は呆れ
惑ひくおそれ敬ひ速愛に妙術あり於寔は將軍の天の作る
英雄はこそとつとあれ其故郷は妻子もや誰が為る富を辞して
鎌倉に還ることを願んや只のあても君は仕へく死をりく恩は
酬へし疑ひあふと久といふは経任術をかきめく欣然としく

口

小膝を進め去り人々の義兼を撃つるついと易り和殿主従
今宵寄るの陣はかへりく筒様くは説かへ明日義兼推寄せ
来くがその時ハ云くは筒様くは巨細は謀を密語バ時夏は
感佩しこの謀究りく妙くあらぬと異議をく領掌あつり
久経任おとく歡びく更酒宴を催しつり折しもあれきのあつり
木枯の風吹暴れて木葉を飛し枝條を鳴らして物の音のさるは
がら子猶且宵闇ありがらづは便ありとくその夜亥の左側は
時夏主従は舊の鎧下なり衣は被更く経任は辞し別れ去んと
まるとは文字揃ハ時夏が袂は携り泣沈みく霎時の名残を惜
たりこれ亦丈夫のあらを釣んと竹の輪ありべしかくは件の主従は
後門より走り寄るの陣へ赴く程は時夏は達六は彼謀を説示し



達六
十四



とるまのいけと
時夏生拘
られし任
了降ろ



文字きり

経任は一味して寄るを破るが可なり又左典廐をりては実を告て
 敗軍の咎を贖ふべき欲汝があらういふやめと問へば連六沈吟ト某
 項日平泉の為件をえいよ士卒勇猛中々大将智謀は長う加るよ
 軍用兵糧乏しくねば攻るとも落べりて君の寄るの副将としく
 一戦は数百の士卒を失ひ贖擒せられ逃る陣所はかへりしとて
 平泉の柵破れど何ぞ功とせられし幸ひあり異あるとて
 鎌倉はかへりあかとも本領は三千貫経任は後ふと死に富貴歡樂
 疆をこれとせりは擇とせんと答たり時夏はくらくち点頭
 然れも如此思ふ寄るを謀るは易く実を告るは却難く人生
 徳は五十年犬馬の齡を貪りて區く人の下をせんや寄る敗れて
 逃るは修羅が軍威はあもく振る奥羽は敵はあらんか
 その由断を窺ひ経任を殺し柵を奪は奥六郡は二が有るべし
 うや其所あはるるは文字撮を柵は遺しおぼくは又寄
 るの陣はあらんや努此彼は曉られ秘は秘よと密語つ主従齊一
 直ましくその曉くは鎮守府寄るの陣は立入る云くは門
 けりこのと死惣大将義兼はかほ取房はあり時夏主従かへり来れる
 よしを穿く先討りて後には歡び聽く起出る衣裳を更呂入る
 對面は程はもや天の明る義兼は床几をちかちか刀野生恙死に
 是へくと招れはるる時夏膝行頓首しくおまへく進を近つれ某
 只管血氣は早りて軍令を用ひて敵の謀は當られく夥の士卒は
 主従二人橋はせりて武恩を忽諸よりせよこの辱はあへるを願れ
 面目をいふれも禍福は糾る纏の如し始終の勝るを勝るゆ某橋は

月島編年

せられ。故に不憶便宜を好まう。一挙一動、経任を討滅さんと疑ひ
 ず。といふを義兼があへば、そのあはれさうも、和殿主従いり、
 あく、輒く脱れ来つるを、向へ時夏莞尔と笑ふ。されば、
 され、其主従獄舎に繋れ脱るべくもあらざらん。これに當り、
 元来、泉二郎忠衡が小卒あり、古主忠衡の泰衡は、其の父の経任が
 親兼任に殺され、その故に、あつて、経任を怨むといへども、勢ひ已とせ
 ぬ。せ、馳入られ、平泉の柵中よりありといへり。あつて、其を竊に
 憐むこと、舊識の如し、きの傷人なり、時夏は密語するやう。
 され、翌の夜、和君主従を故遣るべし、寄るの陣へ、うり去る。あつて、
 柵を攻め、ぬへこの柵西の城戸の峻岨を頼り、守兵甚をけり、日暮
 る。火を放て、西の城戸を開くべし。大軍其処あり、ち入らぬ。東へ攻む

あつて、敗れつべし。かく、経任を擒り、袋の物を取り、如く、
 まち、あつたといへり。某、其許の謀佳妙といへども、其主従脱去らば、
 その必、内辺に及ぶ。その身罪人とあつた。誰が火を放、城戸を開く
 らば、つらと難せし。彼人笑ふ。そのうの、心や、これと、志を
 ち、あつた。友二人あり、これ亦罪を脱る。の謀、た、あつた。
 説諭し、かく、昨の宵、風を舞う。つら、あつた。獄舎を、
 涉り、か、来り、哀れ、御勢を向せ、平泉を攻め、某、一方の攻門を
 受取り、柵を、敵を、慶中、先日、早り、敗軍の、怨を、賞、
 この一、奉、ま、真、や、告、道、の、義、兼、欺、れ、その、歡、び、
 かく、夫、然、る、死、の、寔、は、天、祐、神、助、之、変、成、ら、ば、その、軍、功、和、殿、第、
 かく、と、叮、嚀、を、勞、ひ、つ、これ、の、當、坐、の、勸、賞、を、鹿、毛、の、馬、を、雲、珠

鞍置るを牽立させし贈りし時夏ハ拜し受く惟幕の下へ退けり。

中輯第廿八

平泉役の敗北
假賢人の救書

かくて是利義兼ハ老黨高階兵衛師勝糠田八作重正ホを招き
あせりて敵ハ内應のしれあるを説示し諸軍兵ハ時夏ハ脱れ帰
りしを告させ直進し泉川をわたり平泉の柵の前後に城
戸を稻麻の如く囲せし短兵急攻せり。されば賊後ハ矢種を
惜まば差詰引詰射る程に寄るハ些射あらず。されば盾を被りて
聞たけり。案内知るるにわればこの日も時夏先鋒とす。わけてあ
り。われハ猶も大将義兼を欺る功を諸軍に譲ると称し。く
隊勢を牽く牛牦くと東門は攻薨れば大將義兼の一千餘騎ハ西の

城戸をぞ攻りけり。かくてその日ハ暮れども敵ハ返志のしれあるを
この如く搦軍の如く柵を解に先陣撓らば後陣替り前あつもの
勢うれば後れり。もの死骸を踏越堀は著りの突落られば立頭を
射る落を孰し隙ハあがりけり。浩処ハ柵中ハ火光茂く賊兵残項
騷動を事の紛れハ内より西の城戸を開けし。義兼これを見
信く見く兵共進めと麾うち揮く後れり。のを馳立く。その勇も
馬を乗入れり。あれども敵出あはせ。是ハいうやと疑惑ひく。退りし
散動ほらふ。つる大光ハ倏滅く。城戸ハおのづか。機と鎖陰くと
あく黒雲起り風亦颯と吹暴れく。石を飛し樹を倒さ。寄るの
兵ハれは撲とく死し。もの數十人士卒の如く途を失ひく。同士
あく疾を被り輾つ轉つ。扨擇をそが中ハ高階兵衛師勝を主と

守護し、去らば、糠田八作重正の城戸のほとり、馬を乗せ、
 人々を狼狽せし城戸へ、こゝにありしものを力を勦し、破りし、
 出だせし声、あつた。背力ありし、二三十人、掻き来り、辛く、丹を
 打碎り、扉を推し、一崩れ、退れ、せし程、忽然として、耳辺、靦波
 天地を動し、右のうきより、鬼六鶴、東二左のうきより、五五六、藤五
 正面より、賊主、徑仕、猛卒、是く、二千餘人、四面、八方より、起立し、矢を
 射、うき、雨のどく、義兼を撃と、異口同音、あつて、當り、隨
 破倒せし、斃る、の敷を、あつた、屍の横り、き、等を、乱し、血の流れ、
 盾を浸せり、吐き、大将、義兼も、斃れ、つ、く、え、を、師勝、重正命を
 限り、防戦、あつた、主を、救ひ、やう、な、く、走、り、ゆ、を、賊、後、は、不、脱、と、
 と、く、透、間、を、あ、く、追、蒐、れ、ば、糠、田、重、正、踏、留、り、近、つ、く、敵、を、撃、破、り、
 あ、つ、つ、く、ハ、標、ぐ、り、の、敷、ヶ、所、の、深、癢、は、勢、ひ、竭、く、神、井、覺、六、は、
 撃、れ、よ、う、が、り、程、は、義、兼、ハ、百、騎、足、ら、ぬ、は、斃、れ、十、町、あ、り、
 延、ら、を、東、の、城、戸、を、陽、攻、せ、り、刀、野、太、郎、時、夏、ハ、兵、勢、駐、立、し、その、
 口、先、を、遮、り、留、め、義、兼、脱、き、路、へ、降、参、せ、り、ゆ、れ、ハ、義、兼、主、後、
 大、怒、り、恩、を、致、く、極、悪、人、天、罰、を、ひ、あ、つ、せ、ん、と、敵、圍、を、入、り、
 振、り、咄、と、嘯、く、破、立、れ、ば、賊、徒、ハ、颯、と、披、れ、あ、せ、引、包、く、攻、り、け、り、
 い、と、も、烈、し、死、戦、ひ、は、寄、り、の、士、卒、ハ、過、半、斃、れ、義、兼、僅、に、四、五、騎、
 路、を、棄、て、逃、走、れ、ば、時、夏、一、騎、味、方、は、先、ち、馬、を、危、し、く、追、懸、
 程、は、信、夫、莊、司、元、晴、が、名、代、城、戸、三、郎、守、詮、ハ、時、夏、よ、
 後、ひ、く、東、門、を、向、ひ、は、刀、野、が、野、心、を、ん、く、が、隊、兵、を、一、死、め、
 懸、り、く、竊、に、変、え、備、へ、し、西、の、城、戸、の、寄、り、敗、れ、り、と、あ、り、て、

あ、つ、つ、く、ハ、標、ぐ、り、の、敷、ヶ、所、の、深、癢、は、勢、ひ、竭、く、神、井、覺、六、は、
 撃、れ、よ、う、が、り、程、は、義、兼、ハ、百、騎、足、ら、ぬ、は、斃、れ、十、町、あ、り、
 延、ら、を、東、の、城、戸、を、陽、攻、せ、り、刀、野、太、郎、時、夏、ハ、兵、勢、駐、立、し、その、
 口、先、を、遮、り、留、め、義、兼、脱、き、路、へ、降、参、せ、り、ゆ、れ、ハ、義、兼、主、後、
 大、怒、り、恩、を、致、く、極、悪、人、天、罰、を、ひ、あ、つ、せ、ん、と、敵、圍、を、入、り、
 振、り、咄、と、嘯、く、破、立、れ、ば、賊、徒、ハ、颯、と、披、れ、あ、せ、引、包、く、攻、り、け、り、
 い、と、も、烈、し、死、戦、ひ、は、寄、り、の、士、卒、ハ、過、半、斃、れ、義、兼、僅、に、四、五、騎、
 路、を、棄、て、逃、走、れ、ば、時、夏、一、騎、味、方、は、先、ち、馬、を、危、し、く、追、懸、
 程、は、信、夫、莊、司、元、晴、が、名、代、城、戸、三、郎、守、詮、ハ、時、夏、よ、
 後、ひ、く、東、門、を、向、ひ、は、刀、野、が、野、心、を、ん、く、が、隊、兵、を、一、死、め、
 懸、り、く、竊、に、変、え、備、へ、し、西、の、城、戸、の、寄、り、敗、れ、り、と、あ、り、て、

時夏を資んとく柵を閑けく走せり守詮ハせんまべかて陽の同意
 軍兵は機密を告忽地備を建更しく遊る寄よを追蒐れ賊徒も
 時夏を資んとく柵を閑けく走せり守詮ハせんまべかて陽の同意
 廿一日の月ゆく皎くどく白昼の如しとんれば敗兵十四五騎大将の
 前後より立ち江刺のくへ敗走に間迫り隔れども隈の月之光火
 隠るべくもあざれば時夏ハ諸軍ハ先立ち達しかせとぬけり
 城戸三郎これとんく馬は拍を乗走りて賊軍を馳離れしや
 時夏は近づく程は弓箭刺めく声より立返賊時夏誰をり追入
 城戸守詮あまあり箭一條受よとぬつてえりてと射と射る
 矢来些遠りなれば袖隠の間より隅を射削り時夏怒る些の
 擬議せ馬の平首牽向ふ馬ハ二の箭は曾と射られ狂ひも
 あむ輾轉び主ハ控と反落とまてゑづく起もぬすし
 守詮臆く寄せあはせく首を取んと進む処は時夏が家隸
 矢塚達六後れ走り来つ難力をめて守詮が馬の足を難
 倒せ主ハ馬は乗あがり地上は礮とぞり伏り達六ハ透間をあく
 難力を是しと掛んとしれば守詮ハ弓をぬき受とる閃りと鞍を
 乗もあらし再びかゝる難力を反かへし衝と入りて引組く搦倒
 押へく索を掛りける當下刀野時夏ハ身を起し味方を續くを
 遙よえれば達六ハ守詮に組れりかくてもいあど味方を續くを
 守詮が軍兵の間近く走來つ救ふべくもあざりて間道を遠りて
 逃去りかりし程は守詮ハ時夏を撃漏し遺恨ありしをかれ

時夏を資んとく柵を閑けく走せり守詮ハせんまべかて陽の同意
 軍兵は機密を告忽地備を建更しく遊る寄よを追蒐れ賊徒も
 時夏を資んとく柵を閑けく走せり守詮ハせんまべかて陽の同意
 廿一日の月ゆく皎くどく白昼の如しとんれば敗兵十四五騎大将の
 前後より立ち江刺のくへ敗走に間迫り隔れども隈の月之光火
 隠るべくもあざれば時夏ハ諸軍ハ先立ち達しかせとぬけり
 城戸三郎これとんく馬は拍を乗走りて賊軍を馳離れしや
 時夏は近づく程は弓箭刺めく声より立返賊時夏誰をり追入
 城戸守詮あまあり箭一條受よとぬつてえりてと射と射る
 矢来些遠りなれば袖隠の間より隅を射削り時夏怒る些の
 擬議せ馬の平首牽向ふ馬ハ二の箭は曾と射られ狂ひも
 あむ輾轉び主ハ控と反落とまてゑづく起もぬすし
 守詮臆く寄せあはせく首を取んと進む処は時夏が家隸
 矢塚達六後れ走り来つ難力をめて守詮が馬の足を難
 倒せ主ハ馬は乗あがり地上は礮とぞり伏り達六ハ透間をあく
 難力を是しと掛んとしれば守詮ハ弓をぬき受とる閃りと鞍を
 乗もあらし再びかゝる難力を反かへし衝と入りて引組く搦倒
 押へく索を掛りける當下刀野時夏ハ身を起し味方を續くを
 遙よえれば達六ハ守詮に組れりかくてもいあど味方を續くを
 守詮が軍兵の間近く走來つ救ふべくもあざりて間道を遠りて
 逃去りかりし程は守詮ハ時夏を撃漏し遺恨ありしをかれ

ども二が軍兵ハ二百は足らば。目よあまる敵と挑三戦しくあむく
 陣歿まきまあむ。とあかへへ。生拘を牽立させ大將の迹を
 慕ふく泉川をらり渉せ。これより敵ハ追ぎりたり。程は義兼ハ
 鎮守府に落とまり味方の兵を俟て。天明くあは集會あり。逸
 五百餘名。こが中は城戸三郎守詮ハ隊の軍兵を一人も留せ。積
 時夏ハ腹心の家隸矢塚達六を生拘来り。戦ひの趣を告げ。けま
 義兼感悦斜あり。馳り守詮に對面し。危急を救へる軍功を
 賞嘆し。御辺今度の勳比類なし。莊司がみづり。来會して先鋒を
 進。ともこのうへのりあむべし。これ慮足らば。時夏は欺れ
 家隸糠田重正ハさく士卒の陣歿半は過り。彼時夏の利口
 多く奸智あり。これあむるはあむる。渠ハ執権恩顧のあり。

この故に年来これに誤けられ。竟遂はあま及べり。獅子身中の
 虫といふべし。達六奴と拷問せ。彼奴が伎倆ハ分明あり。んとく
 牽出。いへと下知。隨ふ守詮が士卒四五人索を取。生拘矢塚
 達六を牽出。答を揚。打懲ら。主の刀野が野心の顛末
 責問。大く。ね。達六苦痛堪。堪。時夏ハ隱匿逆意を
 悉く首伏。第一は徑任。部下の偷兒早蠅五頭平。相譚れ
 足利より鎌倉へ貢獻。金銭巻絹を畧棄せ。赤貝の百姓
 苗四郎引太郎。破殺。五頭平を救ひ。又五頭平を欺。死。く
 八島室平。牽。更。吉見義邦を誣。徑任一味の。し。を
 告訴。義邦逐電。及。び。時夏みづり。これ追蒐。途。五頭平が
 支黨。野伏。を。馳。催。し。て。勝。沢。や。追。著。これ。媼。子。并。平。を。破。

時夏を射て守註
達六と擒むを
平泉の敗軍掳
田重正戦死を

月長一編卷四



田重正

田重正



時夏

朝野群載卷四

二十

立られくほねをゆ遂げを賸藍玉院の弟子の女僧は柱られく井平を
 撃漏一伎倆の發覚ん事を懼まき室平と病床を溢り五頭平を
 獄舎に毒殺せり。さ徑任と舊交あるをりく時夏ハ敵を生拘られり
 されども還く尊信饗應せられ更に徑任は相譚れ逃かへり。侍
 ありしに賊の爲は詐の計をけひぬ又義邦主従の逐電を箇様く
 井平ハ箇様く義秀ハ箇様くとこの四人ハ罪ありしに罪人ありし
 り流言させり。まをもるにその実を吐く義兼面色火のどく
 怒り眼は血を沃たぐ平泉のくを疾視反賊時夏いふればかくは
 如く毒悪あり。それゆ彼奴を生拘く首を鎌倉に贈らむ。世の胡慮は
 なるんを小勢ありとも推よせく勝負を一時に決まへし。馬を牽け
 兵どもと跳あぐり。敦園よりそのと死老黨高階兵衛進とゆき主と

諫め寡をりく衆は敵にぞ死當然の道理を述べ。わが不敵は
 近より一圓國府へり。くられ再び奥羽の軍兵を馳催し。く
 後日の征伐あるべしと辞を竭し。禁めし。義兼力及び。く
 馳く國府へ退たつ軍兵催促嚴重かれども寄る。く。ち負て
 賊は破竹の勢ひあり。守護郡司小戦慄れ。催促は後ハ。く。か
 程は十一月はあり。く。毎日雪降積り。く。八馬の駈引不自
 由。未春雪の解る比。く。滞陣せん。兵糧續く。義兼。迷。怒
 至極し。く。竟は滞陣は一。城戸三郎守詮ハ軍功の賞と
 あり。名馬一匹を牽。く。式待し。く。かへ。く。く。足利左馬。義兼ハ
 十一月中旬は残兵七百餘騎を。く。國府と。く。月のを。く。録
 倉。泰著。執權時政の第。く。北條父子。對面。合戦。利。あり

たりし時夏が舊惡逆心の為体又彼義邦廣光并平ホハ義兼
 時夏は誣られく已てをぬを逐電あられど素より犯せつ罪多かり
 義秀が八島室平ホを投懲せしハその友の爲にせしものと潔白の人
 又信夫莊司元晴が家臣城戸守詮が今度の働に彼とあ
 此と終く巨細を告ぐ又いふあり。この時夏が股肱の辨者矢塚達六が白
 状よりあつてちたれく邪正あつたれり義兼不才短慮りて始終時夏は
 欺れ此度の大事を愆せり敗軍の元答ハ素より寛期のあつたれり
 今も見恭に入らん面がせよといへと恥を隠さば非を誘らざ一五
 一十を述しる時政さく呆れ果つあつてく義兼の顔との打
 まりつ肩揺揚ぐ息を吐たあひたや時夏が逆賊は荷贍してこの
 辱めあはんとあわれむ此度の敗北ハ貴所一身の越度あつた時政の

亦不覺之彼奴が親照時ハ荆婦の後弟ありく六勲ハ憐愍の
 誠が仇となりけり一所詮生拘連六をちかく禁獄せし又貴所の
 褒賤ハ廣元ホと相譚めくともくも執達志ハ病後の心推察
 せり退りて休足あへんと可憐は慰れバ義時も亦情を告ぐ頻よ
 嗟嘆あつたり。かくこの日新將軍頼家卿ハ時政廣元ホが
 中よ任せ征東使足利左馬介義兼を營中よ召登り凱陣の儀を
 見奉るの勸益あり軍旅の勝敗を問むく帰國の暇をあがり
 義兼ハ恩を謝し執権父子は別を告ぐ足利ハ帰城し只
 管は愧悶へく病著頻よ再登り遂に逝去のせえあり鏝阿守殿と
 法号ハ嫡男義氏家督なり義氏の弟ハ後卷和田合戦の條にいん
 この下は話や一問話休題足利義兼帰國の比北條江間義時ハ父

時政は密語を義兼敗軍の咎を以て大人の塔の由と誰うも
 ざるものありん又彼吉見義邦の蒲原の子白鳩丸ありし世に隠れり
 又媼子井平ハもりてが家は仕りぬる主の首は違ふとて下野へ追
 遣られし世にもさるる怨あるものあり又朝夷義秀といふ猛者の出処
 定らるるれども生れぬるの匹夫やあべりし世に時夏は誣
 られし骨相書を以て索られし世に死に冤屈ありし世に彼を速く走り
 深く隠れし刑戮を脱れしハ自他の幸ひとて時夏主後が罪を借て
 矢塚達六を由井濱は梟首し義邦廣光井平義秀ホが罪籍ハ冤
 いらるるり赦免せし趣を國へ徇させぬかどの如く行ひては夫の
 政事訟を定るは親疎員負の沙汰なりと世にありし世に民歎入歎ふ
 民後ハ後ハ仇寡しこれ安全の計策之照時が故とて時夏は

この年来情を被ひしと渠逆賊と与せし彼は負くはは
 彼が我を殺る之達六を梟首のり猶豫あるべしとあつてはくよ
 諫し時政これ後ひく達六を誅戮し義邦ホ四人の罪犯寛に
 よるく赦免のりしと國々縣田舎あり残る曲あり徇らせたり信なり
 久於儒仙の教誨善の善の報ひあり悪中々悪の報ひあり天運循環
 身と死ハ暗君も曉ことあり奸宰も枉る小あり義時が世に賢人の
 身の利のありし世に併忠臣義士の誠と天神鑒る今この恩
 赦はあつたりし世に案下某生再説修羅五郎経任ハあひの隨は寄
 世を破りし威勢あり奥羽と動し世にありし世に縁故ハ
 時夏が不義の資も成るものあり亦忌むはあつたりし世に初のごとく
 款待され天王ホが亞もせし世に終は一方の頭領より又彼淫婦

文字搦ハ経任ガ愛妾あれども時夏を釣人乃ニ霎時その枕席を
 めさせもしこれ今ハ要なり刀野は後々く禁めたるを蕪塗鶴東二
 諫るゆあり此度数千の録倉勢を一戦ハ勢走らせり皆是刀野
 太郎が功ハ拍軍何ぞ一婦人を愛惜し信と其部下は失ひかへや
 世間ハ女子多かり文字搦一人ハ限るく只被女子ハ初ノ如ク時夏
 与へぬさうと死ハ恩を感じ情ハ引れておろく用ひられんと願ふべし
 りとの約を違へぬ恨く必変を生せん賢慮を旋しあへとい経任
 まき頭をうち押されは妾影あれども文字搦ハ如死ハ初ハ汝ガ美人と
 稱はるものおつらやとうち笑へば鶴東二又ハあうのそと聞ぬるや
 信夫莊司元晴ハ一個の孫女ありその名を筐姫と唱做しり青春ハ二ハ
 うへハ過渡沈魚落鳳閑月羞花の美人ありと縁竹のあふ詠歌の才

儂ハあつた人食いへり賀美栗原玉造磐井の四郡今ハ後ハもの
 只彼信夫莊司のそとづれ寄ハの敗北己来膽を冷してとらんげん
 口ハ利ものものを且試ハ筐姫を求く脚見ハへり拍軍ハ義経の
 おん子ありと稱し信夫莊司が後ハこれを真と信ハもの暮し
 元晴拒るく筐姫を与るを許さば又謀あり姫ハ信夫莊司ガ
 白髪首をも取りつべし賢慮ハいと真実とて勸むハ大死ハ歡び
 微妙も諷るものうねこれ彼筐とゆんがりを忘れしうありハ鬼六
 矢藤五ハ勇ありあれども才足らば甲しと擇んあり汝彼処へ赴くべし
 支度をせよとのそとづれ鶴東二推辞氣色ありけぬりゆひぬ某
 彼処へ赴くとも十ヲ九ハ元晴決しけり引へりハおんれども下ハ
 彼処ハ到ると死ハその言語ハ就きその案内ハ就死後日ハ謀をねふ

便ありとの饋物ハ箇様々又從者ハ如此くとあふまよ注文一次の日
 物より整く孔服申す馬より跨り賊卒廿人五荷の投爪を扛擔せ
 高館を望くいとをせり不題城戸三郎守詮ハ國府ゆく摠大将
 義兼は辞しつれ隊兵をゆる高館ある圓山の館は歸陣し
 合戦の勝敗時夏が逆心の夏之趣夫塚達六が白状よあつて義邦
 以下の人々は罪あり頭然らるる自分の軍議異見ありて元晴
 義邦は吉一が元晴ハ吉見主従ハ寄りの敗北を風声よあつた
 物り今又時夏が逆謀を巨細よあつて遺恨は堪はぬわかれ守詮が
 夫塚達六を生拘しゆり吾黨の寛枉やうを釋す今らよ天日
 見ると三郎が賜ありとて義邦も廣光もその歡び大なるが主従
 齊一席を起す守詮を再拜し義邦ハ帶りたる重代の刀を取る

守詮は与へる元晴も亦その功勞を褒美し食禄を加増す
 かく又義邦ハ元晴廣光とうち相譚ひ既よ世間廣くかふ
 この処よあつて義秀よあつて世の信ありとて恨らぬ彼人
 今あな旅よありとも越中あつた船向許消息せば傳へてくとも
 あつて廣光彼処へ趣くべしとて心をくりハ早れども時既よ玄冬の
 最中あつて北國ハ雪深く行客途を去あへば雪吹よ撲れ雪
 崩れ埋られ死するもの多るハ常よあつてとめあつて難美の時
 あり春を待とも遅延よあつて元晴只管削く遣らば義邦もあつた
 心のねくあつて老人の議は後ひて廣光を禁めたりとてあつた
 十二月の朔ありとて駒形村あつた田丸標吉ハ養母の忌果て後ト
 わく領主の館は泰りて義邦筐姫と婚姻の祝言を述置よあつた

預られろ沙金四十兩を齎し廣光に遞与せし義邦是を
 笑くうち笑ひ標吉に律美なる何ぞこの金も及んやこれ對面は
 とし元晴も由を告させ翁皆列座し標吉を召進著義邦
 おづとの忠孝を譽更めく件の沙金を賞禄よとせ又時夏が逆謀
 達六が白状の趣を告し六標吉の義邦の厄の釋んとほつを祝
 あり沙金のやも周辭さどさむを不敬かべしと廣光がゆめよ
 志をく受納めく拜謝せり當下元晴含笑く標吉即れ汝を
 ゆく駒形村の長とや他村の民を領移さんと豫ありあんども
 大敵経任鄰郡はあり境と戎をとりあむがかりくしく民を
 動しく吉見殿も世間廣くありあんは汝が館は苗りて
 この君は仕へよりあられは駒形村をもく食邑は宛移ふものて本姓

馬兼は立ち入り嗣忠と名告れりこれいふ二人の子共嗣信忠信が
 判官殿は仕りし忠心は擬はつものころを好よと説かせ六標吉
 おもく感悦し賢息達の片名あぶくあつらんは分は過より併望と
 足り面目これはおまをそや且駒形の宿町は退た物もく取そのへて
 んと答つて速侍は退たく両老黨昌甫守詮は恩を謝し歡びを述
 駒形村へ還りけり暫し水草十郎城戸三郎は遠しく主のそりへ
 来りゆめやう平泉の賊徒蘇塗鶴東二暴道と名告れるもの経任が
 使者と称し美酒乾魚巻絹かど夥齎し主君は見泰を乞ひ追
 退けけん牧撃苗けん秋といふ元晴は頭を傾け逆賊経任故あり
 あり使を遣し物を贈るは実情はあつたが要害をんぬるべしこれ
 とく教ゆも足らぬ小賊ホが首取て何ゆるせんれ出會む臆はるべし

冠者主後へ且く奥へ避かへとのれ召べと居かぐりも飾ぬ威儀
 凛然騒ぐ氣色へかりり現夷の為忤ひひり使若あれば義邦も
 廣光も詰まかぐり次の間へ避けく様子と窺ふ程に執継の善黨が
 運ぶ贈物ハ白木の臺に白銀百枚練絹五十反綿五十屯美酒
 十壺乾魚の折櫃十五前処陝まで扛居りり程に蕪塗鶉東二
 暴道ハ若黨を導れく過る廊下も長袴袴取かぐり八方に
 配る眼光人を射く一癖あべ死面魂佩るる長剣は歩の運びを
 刺撃身を切るごと死寒風はきのの雪の素書院怯は臆せむ
 進み来つ元晴は長揖しく東面の坐に著ぬ畢竟主客の問答
 如何とハ次の巻に解分るをるるをるる。

朝夷巡嶋記全傳第三編卷之四終

吉田屋
 吉田屋

朝夷巡嶋記全傳第三編卷之四
 終

